

「讃岐の中世寺院」を訪ねて

櫻木 潤

毎年、夏が終わる頃、「日本宗教史懇話会サマーセミナー」が開催される。今年の開催地は香川県。サマーセミナーの三日目には、「讃岐の中世寺院」と題した見学会があり、善通寺など、讃岐のいくつかの寺院を訪ねた。筆者は、御霊信仰を研究テーマとし、最近では空海伝の研究にも取りくんでいるため、今回の見学地は魅力的であった。そのうち印象に残った二、三の寺院について紹介したい。

崇徳上皇鎮魂の寺—白峯寺—

白峯寺は、香川県坂出市にあり、五色台のひとつ白峰山の頂にあって、瀬戸大橋を見下ろす風光明媚な場所である。寺伝では、空海が創建し、円珍が再興したとする。元々は五色台を斗藪する修行者たちの山林道場であつたらしい。七棟門をくぐって左手に進むと、「頓證寺」の扁額がかかる勅額門があり、その奥に崇徳上皇の靈廟である頓證寺殿がある。崇徳上皇は、保元の乱で讃岐に流罪となり、当地で亡くなった。勅額門を右に折れ、しばらく歩くと崇徳上皇の白峯陵がある。

崇徳上皇は、怨霊伝承でも有名な人物である。『保元物語』によれば、仁安三年（1168）に西行が白峯陵に詣で、「よしや君むかしの玉の床とて、かからんのちは何にかはせん」との歌を奉ったところ怨霊が鎮まったという。また、白峯寺への参道には、鎌倉時代末期の銘文をもつ二基の十三重石塔が立っているが、その位置は、白峯陵から谷ひとつ隔ててほぼ正面にあたっている。二基の石塔も、崇徳上皇の霊を鎮魂しているかのようなたたずまいであった。

空海誕生の地—善通寺—

善通寺は、香川県の西部にあたる善通寺市善通寺町に所在し、「屏風浦五岳山誕生院善通寺」と号する。真言宗善通寺派の大本山である。寺伝によれば、大同二年（807）に着工し、弘仁四年（813）に落慶したとされる。

善通寺の境内は、大きく二つに分けられる。

五重塔・金堂がある東院と、空海をまつる御影堂のある西院である。西院は、誕生院とも呼ばれ、空海誕生の地とされる。空海は宝亀五年（774）に讃岐国多度郡屏風浦で誕生したとされ、その地がこの善通寺であったという。



西院（誕生院）の中心である空海をまつる御影堂

松原弘宣氏は、多度郡内に、前善通寺址と仲村廃寺の二ヶ所の奈良時代の寺院址があり、いずれも法隆寺式の瓦を出土している。法隆寺は、庄倉を計46ヶ所保有しており、そのうち伊予・讃岐には27ヶ所存在することから、法隆寺と伊予・讃岐が深い関係にあったとする。仲村廃寺は、忍冬唐草文の軒平瓦と複弁八葉蓮華文の軒丸瓦がセットで出土しているため、その建立は七世紀後半とみられるが、前善通寺址については、仲村廃寺と直線にして700メートル程度しか離れていないことや、前善通寺出土とされる瓦の出土地点や出土状況が不明であることから、その建立は仲村廃寺よりも下るとし、善通寺は、空海が満濃池を修造した前後（弘仁十二年〔821〕ごろ）に空海の父田公系列の佐伯直氏によって建立されたとみるべきであると結論づけている¹⁾。

善通寺の名が史料上初めて登場するのは、寛仁二年（1018）五月十三日付け「善通寺司解」である（『平安遺文』古文書編、第2巻、481）。紙幅の都合上、全文を掲げることにはできないが、その内容は、善通寺の領田や免田からの収入は

わずかであり、「寺家例用」・「破壊修理料」がともに大いに不足していることを東寺に訴えたものである。「破壊修理料」がみえることから、当時の普通寺がすでに修理を要するほどの状態であったことが想像できる。したがって、史料上の初見は、11世紀初頭の寛仁二年であるが、普通寺の創建は、それより以前に遡れることは間違いない。しかし、それが、松原氏が想定したように弘仁十二年ごろかどうかは、今後の課題とすべきであろう。

普通寺をめぐるのは、先の「普通寺司解」に、「法花三昧・六時念仏・読経之勤、尤盛也」とあることから、寛仁二年当時の普通寺が、弘法大師建立の寺との由緒をもち、「大師御霊」の効験・功德を強調しながら、年中行事として、不断念仏や法華八講などの天台宗的な色彩の強い法会を特徴とする道場であったとの山陰加春夫氏による指摘がある²⁾。また、武内孝善氏は、これまで普通寺とされてきた空海の誕生地について、空海の母方である阿刀氏の一族が讃岐に居住していた形跡がなく、当時の婚姻形態では母子は母方の一族と生活をともにすると考えられることから、空海の誕生地は、讃岐の普通寺ではなく、阿刀氏が居住する畿内であるとする説を発表している³⁾。いずれの説も、われわれがこれまで持っていた常識を覆すようなものであり、今後、検討しなければならない。

普通寺の創建や、この地方の宗教的風土は、空海の幼少期や壮年期の活動を考える上で、重要な問題である。空海伝研究のテーマとして、今後取りくんでみたい課題である。今回の旅の大きな成果であった。



東院にはお遍路さんや参拝客が後を絶たない

鑑真開基伝承をもつ寺—鷲峰寺—

讃岐平野には、テーブル状のユニークな山がいくつも隆起しているが、このうちのひとつの山容がインドの霊鷲山に似ているとし、天平勝宝六年(754)に鑑真が釈迦如来像を刻み、堂宇を建立したとされるのが、鷲峰寺である。鎌倉時代末期には、大和西大寺の末寺となっている。収蔵庫には、国の重要文化財に指定されている鎌倉時代の作になる木造四天王立像四軀が収められており、間近にその尊容を拝観することができたが、迫力のあるものであった。これらは、嘉元四年(1306)、大和西大寺長老の慈心和尚が六十余の僧侶を率いて大供養を修した頃に安置されたとされている。

鷲峰寺のほか、屋島寺など讃岐平野にある寺院には、鑑真を開基とする伝承をもつものが多い。中世の西大寺流律宗の活動の影響も考えられるが、興味深い伝承である。

今回、「讃岐の中世寺院」として上記の三寺院のほか、空海が唐から帰国後に建立したとされる曼荼羅寺や、讃岐国分寺などを訪ねたが、いずれも古代から法灯を受け継ぐ寺院である。讃岐平野は、空海のほか、円珍を輩出した地であり、平安仏教にとっての母なる地である。しかし、空海誕生の地として有名な普通寺をはじめ讃岐の寺院には、まだまだ研究すべき課題が残されている。今回の旅でも、現地に足を踏み入れてこそ知ることができる発見があり、現地踏査の大切さを実感した。

【註】

- 1) 松原弘宣「讃岐国西部地域における地方豪族—空海と円珍の一族を中心にして—」(同氏『古代の地方豪族』、吉川弘文館、1988年)。
- 2) 山陰加春夫「中世『寺院縁起』の案出と「新史実」化—讃岐国普通寺の場合—」(同氏『中世寺院と「悪党」』、清文堂出版、2006年、初出は1999年)。
- 3) 武内孝善「空海の誕生地」(同氏『弘法大師空海の研究』、吉川弘文館、2006年)。